

インドネシア・パプア州低地バデにおける暮らしと文化 —文化人類学と医療調査の連携を探る予備的研究—

稲村哲也¹⁾、木村友美²⁾、石本恭子²⁾、奥宮清人³⁾、平田 温⁴⁾、
松林公蔵²⁾、今井必生⁵⁾、陳文玲⁵⁾、葛原茂樹⁶⁾、瀬口春道⁷⁾、
エヴァ・ガルシア⁸⁾、藤澤道子⁹⁾

- 1) 愛知県立大学国際文化研究科
- 2) 京都大学東南アジア研究所
- 3) 総合地球環境学研究所
- 4) 北秋田市民病院
- 5) 京都大学医学研究科フィールド医学
- 6) 三重大学神経内科
- 7) 神戸女子大学健康スポーツ栄養学科
- 8) 高知医科大学
- 9) 京都大学霊長類学研究所

本稿は2012年3月6日から3月16日までインドネシアのパプア州南西部の先住民民族アウウの居住地域で実施した文化人類学的予備調査の成果である。この調査は、医学調査及び食・栄養調査と共同で行った。前半は、ディグール川下流域の町バデとその周辺で調査を行った。ここでは、バデの町の地図を作成し、町の主要な行政機関、キリスト教会（カトリックとプロテスタント）、イスラム寺院、市場などを観察した。ついで、栄養調査の受診者のひとりの家庭を訪問し、その生活状況を見た。また、近隣の湿地におけるサゴヤシからのデンプン採取とその調理を観察した。後半には、イア川沿いの村々における医学調査に同行し、家屋の構造、地域の主要産業であるゴム生産と家計収入などの地域経済とその変化、父系クランとリーダーシップなどの概要を調査した。全体として、文化人類学と医学・食と栄養学の共同調査の方法を探索した。

1 はじめに

筆者（稲村哲也）は、2012年3月に、奥宮清人を代表とする医学研究チームと連携して、インドネシア・パプア州で現地調査を実施した。パプア州での調査は初めての経験であり、現地事情についての予備知識はなく、現地調査の方法も現地に着いてから考えるという状況であった。そこで、今回は医学研究チームに密着し、まずは観察を行い、今後の方針を立てることを初期の目的とした。最初の調査地は、パプア州南西部のディグール川下流沿岸の低湿地帯に形成された町バデとその周辺であった。バデには3月6日に入り、3月16日まで滞在した。

バデでは、医学研究チームは現地の診療所（プ

スケスマス）で健診を行った（図1、写真1-2-3）。筆者はまず健診の栄養調査・問診（木村友美）に一部参加し、健診終了後や休日にその関連の調査を行った（共同調査：木村友美・石本恭子）。最初の受診者であるXは「健康状態が良くないので、コメだけを食べる」という特殊事例であったが、健診終了後に彼女の家庭を訪問させていただいた。また、町の概要を把握するため地図を作成し（図2）、現地の伝統的な生業であり食料の中心であるサゴの採取の観察なども行った。

3月13日から15日までは、バデの近くのギミキア（Gimikya）から、ディグール川支流のイア川をボートで遡り、その沿岸のいくつかの村での医学班（奥宮清人、平田温、インドラジャヤ、木

村友美)による筋委縮症患者のフォローアップ調査に同行し、集落、住居、生活などを観察した(図3)。また、同行のパプア人医師インドラジャヤの健診の合間に通訳をしていただき、住民への短時間のインタビューを行った。

ニューギニア島についての個人的な研究関心としては、熱帯の低地及び高地における人びとの環境への適応と利用の形態を知ることであった。これまで研究対象としてきたアンデスやヒマラヤも低緯度に位置する大山脈であり、熱帯における低地から高地までの標高差による環境適応・利用の比較が、ニューギニア調査の目的のひとつであった。

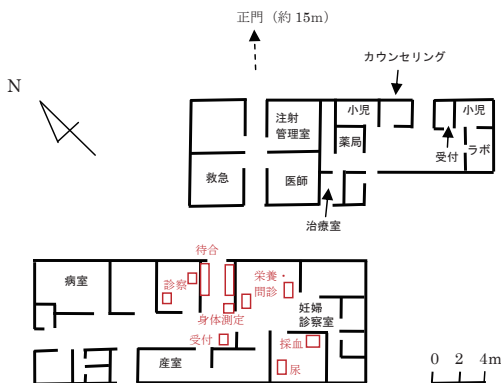


図1 バデの診療所と医学調査 (2012.3 稲村作図)

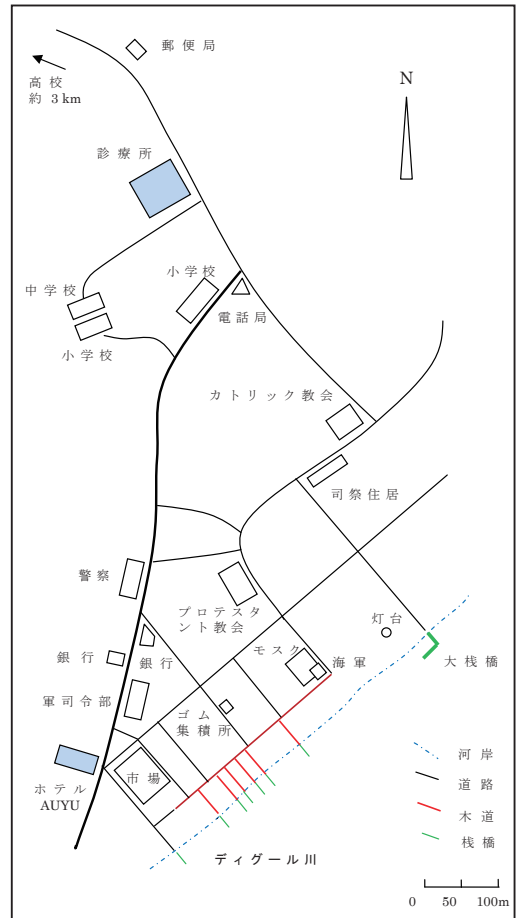


図2 バデ概略地図 (2012.3 稲村作図)

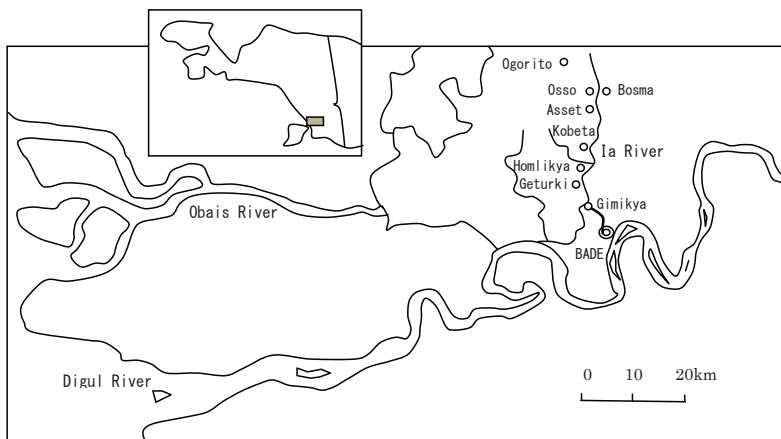


図3 ディグール川・イア川・バデ地図 (Nelles Map Indonesia: Papua・Maluku をベースに稲村が作図 2012.10)

2 パプア州の概要

現在のパプア州は、オランダ植民地時代には「蘭領ニューギニア（Netherlands New Guinea）」と呼ばれていた。オランダの東インド会社（VOC）が1602年に設立され、18世紀末にオランダ政府がVOCから植民地を引き継いだ。オランダは開発・搾取の難しいニューギニア島を他国との緩衝地域とし、オランダ領東インドの一部として統治することはなかった。しかしオランダは当時家臣の立場にあったマルクの王国ティドールのスルタンとの契約によって、「スルタンによる支配権」に基づいて、間接的にこの土地を確保した（ブディアルジョ他1995：20）。1848年にはイギリスとの間で交わされた条約によって島の東半分と西半分を分ける国境線として141度線が決められた。そして、1884年のベルリン会議によって、ヨーロッパ諸国がニューギニアの西半分をオランダ領と認めた。しかし、オランダによる統治は形ばかりで、航海に必要な避難所や真水の補給所として海岸線にオランダ領の標識があるだけだった。初期のオランダの移住地は西部のフォーヘルコップ（パーズ・ヘッド）か南東の隅にあるメラウケであった（前掲書：20）。

ニューギニアは1941年、一時的に日本に占領されたが、1944年に連合軍が「解放」し、1946年にオランダに「返還」された（佐伯奈津子1999a：6）。

日本の侵略時、西ニューギニアにあったのは、多くのキリスト教の伝道所—北部にはプロテスタント、南東部にはカトリック—の他には、わずか15か所のオランダ行政機関の出先にすぎなかった（ブディアルジョ他1995：22）。

1945年、日本降伏の2日後、スカルノが独立を宣言した。オランダはインドネシアの再植民地化をもくろんだが、結局、1949年のハーグ円卓会議で、アメリカの支持によってインドネシア連邦共和国に主権が委譲された。しかし、円卓会議での妥協の結果、西ニューギニアはオランダ領にとどまった。

ニューギニア島西部の帰属問題では、旧オランダ領東インドのすべてを併合しない限り完全独立はありえないとしたインドネシアと、帝国主義的秩序の瓦解によって自尊心が傷つけられたオランダとが全面対決する（佐伯奈津子1999a：8）。オ

ランダは、西ニューギニアに固執する表向きの理由として、パプア人の民族自決権を掲げ、自治を与える政策を推進した。そして、1961年にはパプア人が多数を占める議会が開催され、10年後に独立を認めるという決定がなされた。しかし、このような「西パプア国建設」の動きに対して、インドネシアは武力による強硬策に出る。両国の対立が泥沼化する中、アメリカの仲介によって和解交渉が行われた。国連による暫定的な管理を経て、1963年に、6年後の住民投票によって最終的に帰属を決めることを条件として、西パプアの行政権がインドネシアに引き渡された。

これ以後、西ニューギニアは「西イリアン」と呼ばれるようになった。議員全員をインドネシア政府が任命する議会が作られ、行政の実権はインドネシア政府派遣の行政官と軍人が掌握した。自由パプア運動（OPM）を中心に独立運動が展開されたが、インドネシア国軍によって武力鎮圧された。1969年、「西イリアン」は1025人の地元代表による形だけの「自由投票」によりインドネシアの26番目の州となった。インドネシア軍の將軍らによって地元代表が脅迫され、反対票無しで「インドネシアの下に」残ることが決議されたのである（ブディアルジョ他1995：56-63）。1973年以降は「イリアン・ジャヤ（Irian Jaya）」と呼ばれるようになり、2001年1月1日より、自治権拡大法が発効し、正式名称が現在の「パプア州（Propinsi Papua）」となった（河合信司2002：42-43）。

現在のインドネシアの2億人を超える人口の7割以上はジャワ、スンダ、マデウラ、マレー等のオーストロネシア語族に属する民族で、イスラム教徒が人口の87%を占めている。一方、パプア州では、推定200万人の人口の80-85%がメラネシア系を中心としたパプア人（先住民）であり、キリスト教徒が州人口の75%を占めている（河合信司2002：15）。地方政府や軍事・警察組織の要職の多くは、州の外部からの移入者によって占められ、先住民との軋轢も随所で表面化している（前掲書：15）。

河合が述べるように、近年における市場経済の浸透、インフラ整備、あるいは開発援助プログラムは、これまで外部社会との接触が極端に少なかった小さな先住民集落の社会的、経済的環境に

重大なインパクトを与えている。イリアン・ジャヤ州の先住民は、教育レベルや文化の違い、そして、情報の質・量ともに外部社会に対して大きなハンディーを負っているのが現状である（前掲書：15）。

3 バデとその周辺における人びとの生活 ＜バデの町＞

バデは、パプア州の南東部に注ぐディグール川の下流の川岸に位置する。ディグール川は河口から蛇行しながらまず東に延び、中流からは北に溯上する。バデは行政的にはマッピ県（県都メラウケ）に属し、アウユ（Auyu）が居住するエデラ郡の中心である。パプア州の州都であるジャヤブラからバデには空路しかない。定期便はまずメラウケへの便があり、メラウケからバデの便がある。調査団はチャーター便で空路バデにはいった。空港ができたのは今から50年ほど前である。

空港から数分でバデ市街の南の端に位置するホテル「アウユ」に到着する。バデ市街は、南西に下るディグール（Digul）川の中流域の右岸（北西岸）に形成されている。

調査団が宿舎としたホテル「アウユ」の前に舗装された幹線道路がほぼ北に向かって延びている。この道路沿いに北に進むと、インドネシア軍本部、銀行、警察署などがある。その先で、道路は北東に緩やかに曲がり、左手に小学校があり（写真4）、その先で、南東から北西に伸びる道路に突きあたる。T字路の右手角に電話局があり、そこを左に折れるとすぐ左手にブスケスマス（診療所）がある。ホテルから診療所までは約1 kmである。

ホテルの正面に、道路を隔てて市場がある（写真5）。市場では、先住民であるパプア人（主としてアウユ）の女性たちが、サゴ澱粉、タロ、ヤム、キャッサバ、野菜類など、地域の産物を売っている。市場の周囲には、外部から供給される食品、衣料、雑貨などの商品がならぶ商店が軒を連ねている。これらの商店の店主は、ジャワ人など、島外から移住したインドネシア人がほとんどである。

ホテルから正面に伸びる道を、市場を左手に見て進むと、ディグール川の岸に出る。そこから川に向かって木造の栈橋が延びている。その栈橋の

手前から、ディグール川の岸辺に沿って木の歩道が延びている（写真6）。川岸は湿地となっているからである。ディグール川はこのあたりでは、北東から南西の方向に下っており、川岸の木道もその方向に続いている。この木道から6本の枝道が川岸の方に延び、その先にはそれぞれ栈橋が設けられている。それぞれの栈橋には、小型の木造汽船が停泊しており、外部世界との盛んな交易の基地となっている（写真7）。木造船の造船設備もある。この栈橋周辺の家々のオーナーも島外から移住したインドネシア人であり、町の経済の担い手が外部からの移民であることを示している。

木道を北東端まで歩くと、その向こうに灯台が見え、その先にコンクリート製の大栈橋がある。ただし、この大栈橋には船は接岸しておらず、ディグール川の中央部に大型船が停泊しており、そこに小舟で荷物を運んで積み上げる様子が見られた（写真8）。

木道の北東端の左に大きなモスクがある。そこを左に折れて2ブロックほど進むとプロテスタント教会がある。その先を道なりに右に折れてさらに進むと、今度はカトリック教会がある（写真9）。その角を左折してまっすぐ進んだところに電話局、その先に診療所がある。診療所の先には郵便局があり、道なりに3 kmほど先に行くと高校がある。高校には21名の先生と約300人の生徒が通っているという。

バデの中心部は、ゆっくりと一周しても1時間ほどで歩けるほどの大きさである。そこに、様々な公共施設、宗教施設、商店、宿、市場、船着き場がそろっている。町の創設・発展の歴史や統計に関する資料は全く手に入れることができなかったが、地図を作成し、町を散策して観察するだけでも、パプア州の縮図としての歴史的・社会的背景をある程度読みとることができる。

政府の公共施設に勤める公務員、船による運送事業者、商店主などのほとんどは、先住民ではなく島外から移住したインドネシア人である。先住民のほとんどがキリスト教徒であるのに対し、外部からの移住者の多くはイスラム教徒である。そのため、町中に2つのキリスト教会とモスクが併存している。

パプア州への移住政策は1964年に開始された。最初はメラウケに27戸が移住した。その後、パ



写真1 健診が行われたバデの診療所



写真4 バデの小学校



写真2 バデで行われた医学健診



写真5 市場で多様な果物、作物が売られている。



写真3 健診で食事調査などの問診が行われた。



写真6 ディグル川沿いの湿地に作られた木の橋

プア州への移住の割合は、第一次五カ年計画（1969～73年度）の移住者目標総数の0.3%から、第四次五カ年計画（1984～88年度）の22.3%へと、急カーブで増やされていった（佐伯奈津子

1995b：36）。パプア州では、移住に伴い、土地をめぐる問題が多発している。パプア州のほとんどの土地は、アダット（慣習法）によって所有されている。政府は1960年の農地基本法でアダット



写真7 ディグル川の右岸にバデの町が広がる。右端にモスクが見える。



写真8 ディグル川を往来する丸木舟。停泊中の貨物船に小船から荷が積まれている。



写真9 バデのカトリック教会のミサ

による土地所有・保有を認めているが、それは公共の利益に反することがなく、その土地から収獲物があると証明される場合のみとされている。それでは、先住民の所有する土地が移住地として利

用される場合の歯止めにはならない。補償金があったとしてもわずかであり、土地の明け渡しが強制されること多いという。

オランダ植民地時代、政府はニューギニアの統治と開発には熱心でなく、むしろ、ミッション（プロテスタント）が教会を建て、学校や病院を経営してきた。オランダのカトリックは第二次世界大戦前に伝道を始めたが、本格化したのは戦後であり、その拠点はメラウケに置かれた（渡辺信夫1995：71）。インドネシアへの併合のあと、インドネシア教会協議会（DGI）が重要な役割を演じ、パプア州の教会の信徒の数は、1963年の13万人から1974年には36万人に増加した（シトイ2世他1985：109）。

＜バデの周辺部における人びとの生活＞

バデ周辺の地域は、生態系としては「低湿地帯」であり、「サゴヤシ文化圏」に属している。大塚柳太郎を代表とするグループが、バデの東に位置する、パプアニューギニアの南部低地のギデラ社会で本格的な研究をしており、それがバデ周辺地域の理解にとって大いに役立つ（大塚柳太郎編著2002、河辺俊夫2010）。

「北側か南側かを問わず、沿岸部とその後背に広がる低地に住む人びとは、類似した環境条件のなかで類似した生業形態をつくりだしてきた。そのなかでも特徴的なのは、低湿地に生育するサゴヤシからとるデンプンを主食とする適応形態である。サゴヤシ文化圏とも呼ぶことができる低湿地帯は、北側ではメンベラモ川やセピック川、南側ではディグール川やフライ川に代表される、多くの河川の流域に広がっている」（大塚柳太郎2002：51-52）。

バデ周辺地域でも、人びとの伝統的な主食はサゴ澱粉である。サゴヤシは10年から15年で15mほどの高さになり、幹の直径が50-75cmに生長し、一度だけ開花・結実して、枯死する。開花するまで幹の中に澱粉を蓄積し続け、その後澱粉は変成して食用に適さなくなるため開花の直前に利用する（河辺俊夫2010：144）。人びとは、サゴヤシを開花前に切り倒し、幹を割って中の髓を取りだし、それを水で晒して澱粉を採取する。1本当たり、70～100kgの澱粉が取れ、それで1家族（5人）の約2週間分の食料となる。サゴヤ

シは所有権がはっきりしており、移植した者が所有権を持つ。側枝から自然に生育した場合も、元の幹の所有者が自動的に所有権を得る。サゴヤシの移植に適した林は父系クラン（出自集団）の土地所有の規則にしたがって所有されている。

サゴヤシの優位性としては、①通年利用が可能、②年による生産の変動がなく病虫害にも強く、③収穫以外の作業がほとんど不要で生産効率が高い、などが挙げられ、一方で、欠点として、サゴ澱粉は純粋に近く、炭水化物以外の栄養をほとんど含まないことが指摘されている（大塚柳太郎2002:57-59）。そうした欠点は、魚介類、飼育ブタ、また、とくに野生動物の狩猟によって補われてきた。

診療所に近い郵便局の裏手はすぐに湿地と森が広がっており、そこで、サゴ澱粉採集を見ることができた。現地に着くと、高床の木造家屋の近くで、切り倒されたサゴヤシの幹が半分に割られており、2人の女性と1人の男性が、特製の一種の手斧で中の髓を削り取る作業をしていた（写真10）。近くでは、サゴヤシの葉の各部位を巧妙に組み立てた伝統的な装置が用意されており、そこで澱粉を濾す作業も見ることができた（写真11）。装置は、サゴヤシの葉柄の部分半分を切った、約3mの樋の部分と、地面にしつらえた澱粉をためる容器の部分（約2m×1m）からなる。樋の上部で削り取ったサゴヤシの髓を手でもみながら水を流す。澱粉を含んだ水が樋をつたって容器に流れ込むが、途中の2ヵ所に髓を濾す仕掛けがあって、繊維質がそこで遮蔽されて、容器には細かい澱粉質だけが流れ落ちるようになっている（写真12）。

バデの町の周辺では、パプア人（先住民）の日常の暮らしを見ることができる。健診の最初の受診者であったXさんの家は、病院のすぐ裏手に位置していた。家はコンクリート製の近代的なタイプで、息子夫婦と娘夫婦と孫たちが同居する大家族を成している。隣接して、ご主人の妹2人とその家族が住んでいる。それぞれの家族は大家族をなし、互いに親しい関係にあった（図4）。この2家族の近隣には、高床式木造家屋もあり、より伝統的な暮らしを送る人びとの生活も見られた。

妹のひとりの夫はミッション系学校の元教員



写真10 倒したサゴヤシの幹から髓を掻きだす作業



写真11 すべてのサゴヤシの葉で作ったサゴ澱粉濾過の仕掛け



写真12 サゴヤシの髓の繊維質が残り、細かいサゴ澱粉が下に沈殿する。

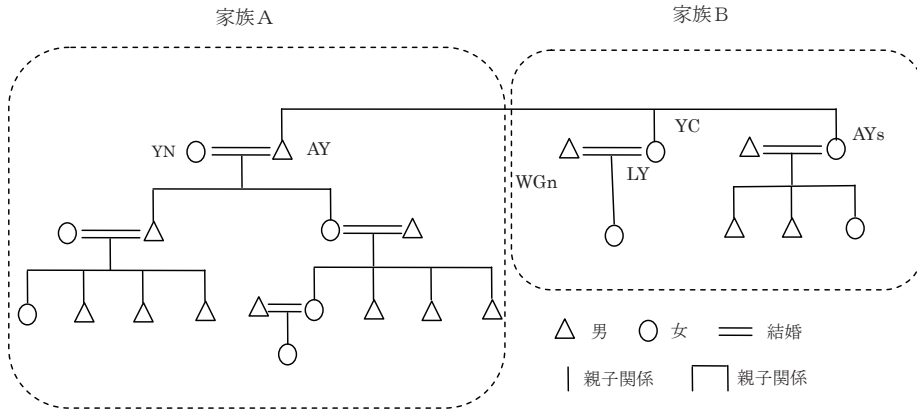


図4 拡大家族A・B (兄と妹2人は隣接して居住)

で、彼の経歴は次のようであった。1950年にHomlikyaで生まれ、9歳まで村に住み、現地の学校に通った。1960年にKepiのオランダ学校に入学し、続いて、1963年にKepiの中学校に入学した。さらに、1966年にKepiの高校に入学し、1969年からMeraukeの師範学校で学び、1972年にBadeで先生になった。彼の経歴は、前節で述べた、Meraukeにおけるミッションの活動を反映している。

4 イア川沿いの村々

<イア川地域の概観>

バデ市街から北に車で30分ほどで、Gimikyaの船着き場の近くに到着する。そこから船外機付きのボートに乗って、イア(ia)川を溯上する(写真13)。2時間ほどでイア川の最上流に位置するOgorito村の船着き場に着く。そこにはまだ栈橋はなく、浅瀬でボートを降る。そこからOgoritoまでは森の中の道を歩く。途中、湿地や小川を越えるが、そこには板張りの道が設けられている。途中、整然と植林されたゴム林を通過する(写真14)。1時間半ほどでOgoritoに到着する。そこでは、森が開かれ、東南から北西に延びる大通りの両側に、約100戸の木造高床住居が並んでいた。高床家屋の一例の平面図を示しておく(図5、写真15-16)。Ogoritoでは、医学班がALS(筋委縮性側索硬化症)患者1例のフォローアップ調査を実施した(写真17)。

Ogoritoの調査のあとイア川を下り、約15分で

Osso村の栈橋に到着した。Osso村は、栈橋からまっすぐに延びる大通りを進むと、右に小学校があり、その先に木造のカトリック教会がある。さらに進むと三叉路に突きあたり、そこから左右に通りが延びている。その通りに沿って、木造高床住居が並んでいる(写真18)。また、コンクリート製のモダンなタイプの家が増えており、その建設がブームとなっていた(写真19)。最上流の

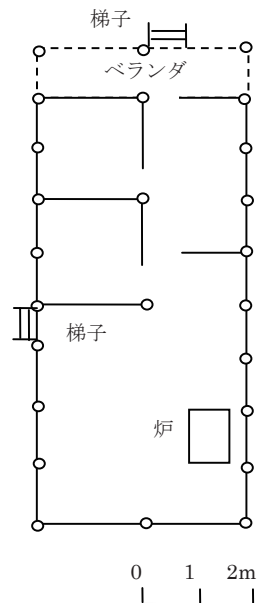


図5 木造高床家屋



写真 13 イア川を上流に向けて進む。



写真 16 高床式住居の中の台所



写真 14 植林されたゴム林。中央の木の根元にゴム樹液を溜める缶が付けられている。



写真 17 オゴリト村の健診。インドラジャヤ医師が患者を診ている。



写真 15 オゴリト村の高床式住居の外観



写真 18 オッソ村の三叉路の広場



写真 19 新しいタイプの家の建設ブーム



写真 22 ゲトゥルキ村の教会。独自の文様が施されている。



写真 20 家の中の台所で乾燥されるゴムの一次加工品



写真 23 ホムリキヤ村の「洞窟のマリア」。このような聖母像はラテンアメリカなどでもよく見られる。



写真 21 丸木舟で移動する家族



写真 24 焼畑を耕作している。向こうではまだ火入れをしている。

Ogorito 村ではほとんどが木造高床だったが、他の各村でも同じような建築ブームの状況が見られた。ただし、木造高床の伝統家屋もそのまま残している世帯が多かった。湿気の多い低地では、やはり伝統的な高床住居の方が健康的で住み心地も良いようである。

この地域の主要な産業はゴム林によるゴム生産であるが、住居の中で乾燥している生ゴムの一次加工品をしばしば目にした（写真 20）。また、一般住居の中に、数戸の店があった。

Osso 村で、小学校の先生の家にお世話になり 2 泊滞在した。そこを基地にして、翌日から医学班が、Osso のほか、イア川沿いの各村、Bosma, Asset, Kobeta, Homlikya, Geturki, Gimikya で フォローアップ調査を行った。

イア川の各村での往来には小型ボートか丸木舟が用いられているが、住民の日常生活では、各家族が所有する丸木舟が使われている（写真 21）。上流部の Ogorito と Bosma には栈橋がなく、他の村には木造の栈橋設けられている。また、栈橋や村へのアクセス道、教会、集会所などの公共施設を比較すると、バデからのアクセスがより容易な下流ほど、近代化の進行が進んでいるようであった。すべての村にカトリックの教会があり、またいくつかの村には野外にもカトリック聖人像などが安置されており、この地域に古くからカトリックの伝道が入っているという歴史が反映されていた（写真 22-23）。

<焼畑>

Gimikya に戻った最終日、ちょうど焼畑の作業を見ることができた（写真 24）。森を伐採して開かれた耕地の一画では、まだ火入れが行われていた。また別の一画では鋤で畑を耕し、タロイモやヤマイモの植えつけが行われていた。ところどころにバナナやトウモロコシが芽を出していた。焼畑ではさまざまな作物が混栽されている。数家族がそれぞれの場所で作業をしているようであった。

<Osso 村での聞き取り調査から：ゴム生産、地域の経済、学校>

Osso には 147 世帯、男 193 人、女 187 人の計 380 人が居住している。地域の人びとの主な収入源はゴムである。

ゴムは 1 本の木から 1 日 1 カップくらい（約 0.5 リットル）採取できる。ゴム林の樹間の間隔が約 5 m として、1 ha 当たり 400 本、4 ha で 1600 本の計算となる。

一人が 1 日で 10 から 15 kg のゴムを採取するという。各家族で 1 日に 50 ～ 60 kg くらいに相当する。1 kg あたり 7,000 ルピア（1000 ルピア = 8.14 円）として、1 日の家族の収入は 350,000 ルピア（約 2800 円）となる。月に 1 ～ 1.5 トン生産するとして、月収は 7,000,000 ～ 10,000,000 ルピア（56,000 ～ 80,000 円）、年収としては、日本円で約 70 万円から 100 万円と計算できる。

バイクが村に初めて入ったのは 5 年ほど前である。バイクの価格は約 20,000,000 ルピア（約 16 万円）で、中古はその半額から 8 割くらいである。現在は村内に 6 台のバイクがある。テレビは 6 ～ 7 年前に入った。テレビの価格は約 2,400,000 ルピア（約 2 万円）だが、パラボラアンテナ、バッテリー、発電機などを含むと総額で約 7,000,000 ルピア（約 6 万円）となる。現在、村内に 12 台のテレビがある。ボートのヤマハ・エンジンは 15 年ほど前に初めて入った。約 16,000,000 ルピア（約 13 万円）で、今は多くの人が所有している。ボート本体は村内で作られる。丸木舟と組板の舟がある。

村はオランダ時代には、現在の Osso と Asset が含まれる Sairin 村だったが、インドネシアになって、Osso 村として独立した。そのときに学校も新築された。現在 6 年生までの学校がある。小学校を卒業し、進学する場合は、バデの中学校（Junior high school）で勉強し、その後は、Merauke の技術専門学校（1 年）かバデの高校に行くことが多い。

オランダ時代にこの地域にカトリックが入ってきた。神父はオランダ人で、バデに住んでいたという。

父系クラン（出自集団）、チーフ、結婚

住民はそれぞれ、祖先を共有するクランに属し、各クランのチーフが村ごとにいる。各クランはそれぞれが占有する共有地を持っている。チーフには、メンバーの中の最上世代に属し、指導力があって、伝統をよく知っている人が選ばれる。チーフが死亡するか、ふさわしくない場合、クランのメンバーが集まって、次のチーフを選ぶ。

クランは外婚単位となっている。つまり、同一クラン内では（祖先が同じため）結婚が禁じられ、男子は他のクランから嫁を迎える。以前は親同士が結婚相手を決めたが、今は恋愛結婚が多くなった。村内での結婚が多いが、4分の1くらいは村外から嫁いできている。Kepi (Capital)、Bosma、Ogorito、Sibi、Konobi などから婚入している。婚入する女より、外に出る男の方が多い。若い男が Merauke や Java などに行くことが多い。

チーフは、クランの男子メンバーが結婚すると、焼畑とゴム栽培のため、一定面積のクランの土地を分け与える。夫が亡くなって未亡人となった女性は、3～4年間は再婚することが禁じられる。もしその規範を破ると、夫方のクランは、そのクランの土地を使うことを禁じ、以後未亡人を援助しない。

それぞれのクランには名称があり、それが外部者には姓 (Family name) のように捉えられている。

また、各クランはそれぞれトーテムを持っている。以下はその例である（左がクラン名：右がトーテム）。

Mumuru：香木

Yugusan：“yagusan” という木の一種

Yafu：“Sogom” singing bird 鳥の一種

Somam：“Sogom” (Yafu とトーテムが同じため、Yafu とは結婚できない。)

Saku：“tuna” 土

Kuma “kore” insect

Hogena：Evil (?) eggs (Mumuru の古い姓で、Mumuru と結婚できない)

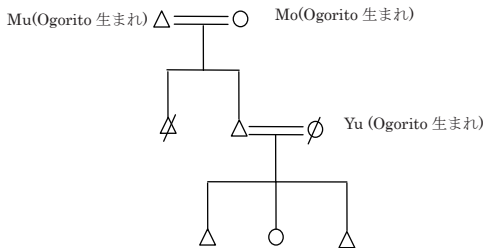
Ruyu：“Ipuyu” Black yakob bird

Kasiman：“Kasi” wood

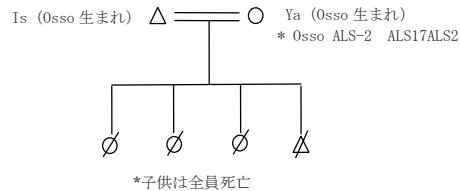
Bagai：wood の一種、外側が木質

Waboman：祖先の名

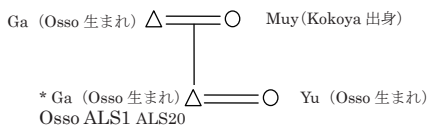
①Ogorito ALS 男



③Osso ALS-2 ALS17



②Osso ALS1 ALS20



*兄弟は多い。子供はいない

④Bosma ALS? ALS19

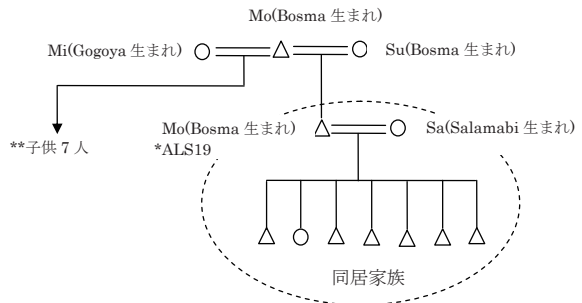


図6 受診者の家族系図の例（クラン名の記号のみ記した）

5 おわりに—医学研究と文化人類学研究の連携強化に向けて

生活習慣病において、食と健康の関係は特に重要な課題である。2で紹介したように、食と文化に関する共同調査を試行的に実施したが、食に焦点を当てながら、住民の生業・生活・経済、またその変化を文化人類学的方法で検討することについては、その可能性・有効性が明らかになったと言える。

ALSなどの原因不明の病気の究明に関して、文化人類学的手法が実際に役立つかどうかは不明である。今回の調査中、何人かの患者について、家族関係・婚姻関係を聞き取りし、4例の系図を作成してみた（図6）。非常に限定的な範囲の系図であり、これらがとくに意味のあるデータとはいえないが、より広範囲の系図などによって、患者の家族・婚姻・親族関係の把握が、医学調査のデータとして役立つか知りたいところである。チェンドラワシ大学に人類学部があり、その若手教員や大学院生の協力が得られれば、特定村落全体の家族・婚姻関係、さらに親族関係の聞き取りが可能であり、村落の親族構造、婚姻構造の包括的な研究も可能である。それができれば、医学調査に実質的に役立つデータとなるかもしれない。また、そうしたデータは、文化人類学自体の研究としても、社会の特質を把握する上で重要なデータとなる。

いずれにしても、英語能力や専門知識をもつ院生レベルの共同研究者や通訳の協力を得て、ある程度のゆとりある調査期間が確保できれば、医学・栄養学・文化人類学等の実のある共同研究が可能であり、相互の分野にメリットがあることが今回の予備的研究によって明らかになったと言える。

参考文献

- 大塚柳太郎 2002 「第二章 沿岸低地—サゴヤシ採集民ギデラの生態史」大塚柳太郎（編著）『講座・生態人類学5 ニューギニア—交錯する伝統と近代』京都大学学術出版会
- 河合信司 2002 『先住民社会と開発援助—インドネシア イリアン・ジャヤ州ドミニ集落の事例—』明石書店
- 河辺俊夫 2010 『熱帯林の人類生態学—ギデラの

暮らし・伝統文化・自然環境』東京大学出版会

- 佐伯奈津子 1995a 「冷戦と経済利権で消された『西パプア』」久保康之（編著）『森と海と先住民 イリアン・ジャヤ（西パプア）』インドネシア民主化ネットワーク, 4-12 頁
- 佐伯奈津子 1995b 「周辺化される先住民—移住政策の問題」久保康之（編著）『森と海と先住民 イリアン・ジャヤ（西パプア）』インドネシア民主化ネットワーク, 34-41 頁
- シトイ2世, バレンティノ, フリドリッ・ウクル, サアド・チャイワン, ゴウ・モウ 1985 『アジア・キリスト教史 [2]』教文館
- ブディアルジョ, カルメル&リム・スイ・リオン 1995 （小野寺和彦訳）『世界人権問題叢書 14 インドネシアの先住民と人権問題—西パプアにみる民族絶滅政策』明石書店
- 渡辺信夫 1995 「イリアン。ジャヤ教会事情」久保康之（編著）『森と海と先住民 イリアン・ジャヤ（西パプア）』インドネシア民主化ネットワーク, 71-74 頁

Summary

Lifestyle and Culture in Bade, Lowland Papua, Indonesia; A Preliminary Study for the Collaboration between Cultural Anthropology and Medical Research

Tetsuya Inamura¹⁾, Yumi Kimura²⁾, Yasuko Ishimoto²⁾, Kiyohito Okumiya³⁾,
Yutaka Hirata⁴⁾, Kozo Matsubayashi²⁾, Hissei Imai⁵⁾, Wenling Chen⁵⁾,
Shigeki Kuzuhara⁶⁾, Harumichi Seguchi⁷⁾, Eva Garcia⁸⁾, Michiko Fujisawa⁹⁾

- 1) Aichi Prefectural University, Faculty of Foreign Studies
- 2) Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
- 3) Research Institute of Humanity and Nature
- 4) Kitaakita Municipal Hospital
- 5) Department of field medicine, Kyoto University
- 6) Mie University, Department of medicine
- 7) Kobe Women's University
- 8) Kochi Medical School
- 9) Primate Research Institute, Kyoto University

This article describes a preliminary study carried out along with medical and nutritional research in March 2012, in the southwest of Papua, Indonesia where the indigenous people Auyu settles.

First, we started our research in Bade, a town located lower part of Digul River and around the town. Author of this article walked around Bade visiting government offices, Christian church (both Catholics and Protestants), Muslim temple, and a market and then created the map of the town. And then, we visited a home of a diabetic patient who joined medical/nutritional check-up to observe her lifestyle. We also observed the process to get Sago starch from Sago palm in the neighboring marshy jungle, as well as Sago cooking at her home.

Later, we visited some villages along with Ia River and observed the structure of houses, researched local economy such as rubber industrials and household income and its change, and patrilineal clan and its leadership. Through these researches, we sought the optimal method for the collaboration between cultural anthropology and medical/nutritional research in the field.